

東洋書院
書籍部
圖書部

抄ムスルニマ
入スルニマ
ノ子ナリ
可キニル
諸史皆似
後ノ二然
紀中ニ世
本中ニ世
後ノ附セ

ウ
ル
レ
ム
及
マ
リ
一
共
治
王
ノ
家
ハ
累
世
日
耳
曼
國

中
オ
レ
ン
ジ
ノ
部
長
ニ
シ
テ
和
蘭
始
メ
テ
國
ヲ
建
シ

時
其
父
ウ
ル
レ
ム
推
戴
セ
テ
レ
テ
其
統
領
ト
為
リ
後

ウ
ル
レ
ム
英
王
ウ
ー
ル
ス
第
一
世
ノ
女
マ
リ
ー
ヲ
娶

大島貞益 纂譯

aaaa

改正
史
一
一
一

テ王ヲ生ミ王長ノ又ゼームス第二世ノ女ヲ娶
 レリ故ニ王ノゼームス第二世ニ於ルハ其甥ニ
 シテ且女婿ナリゼームス位ニ即テ國人其政ニ
 服セス時ニ王其父ニ繼テ和蘭ノ統領ト為リ佛
 王ルイス第十四世ノ兵ニ敵シテ大ニ威名アリ
 加フルニ諸王族ノ中マリノ血胤最近キヲ以
 テ國人遂ニ之ヲ迎立ス英國ノ例女王位ニ當ル
 コトアリト雖其夫ヲシテ政ニ與ラレメス然ル
 ニ王モ亦英國王統ノ近親ナルヲ以テ夫妻相並
 テ位ニ蒞マシメシナリ然レトモ萬機ハ王躬之

ヲ統理シ后ハ其位ヲ共ニスレトモ其政ヲ分タ
 ス唯王事ヲ以テ他國ニ在ル間時々朝ニ臨ムノ
 ミナリ○是歲二月議貞改撰ノ勞ヲ省キ前月假
 ニ徵聚セル所ノ貢員ヲ用キテ公會ヲ設ク此會
 中始メテ政府財用ノ公私ヲ分ツコト起レリ是
 ヨリ先政府一歳ノ費用ハ新主代立ノ初年議貞
 之ヲ議定シ其數歷代同レカラスト雖王皆之ヲ
 專用スルコトヲ得シカ是歲公會始メテ之ヲニ
 分シ其百二十万ポンド中ニテ半ヲ以テ政府ノ
 公費ニ供シ半ヲ以テ王ノ家費ニ供ス是ヨリ貢

税ヲ制限スルコト遂ニ公會ノ權ト為レリ○初
 王ノ英ニ入リシトキ國人舉テ之ヲ悦ビレニ非
 ス公會中ト雖往々異說ヲ立ツル者多ク且王和
 蘭ノ統領ヲ兼テ既ニ金貨ニ富メルヲ以テ公
 會ニ屈セサルヲ憂フル者アリ故ニ故王ゼー
 ス在位ノ間ハ議院年々二百万ポンドヲ獻納セ
 レカ王ノ世ニ至テハ其數僅ニ百二十万ニ過キ
 ス且其用途ヲ限リシモ亦此意ニ原ケリ其後王
 其攻入ノ經費七十万ポンドヲ和蘭ニ償ハントニ
 之ヲ議院ニ請ヒレニ議員慳ヲ求ニ應セス是ヲ

以テ王大ニ望ヲ失ヒ一時位ヲ棄テ、和蘭ニ歸
 ラントシタルコトアリ國內又一說ヲ持スル者
 アリテ曰フゼーマス無道ナリト雖未位ヲ去ル
 ハカラス唯少シク其權ヲ殺テ之ヲ復辟ス可シ
 ト此輩亦皆王ニ從フコトヲ樂マスジコビテス
 ト名ケテ別ニ一黨ヲ成シ爾後數世ノ間頗政府
 ノ憂ヲ為セリ○是歲三月ゼーマス佛王ノ軍艦
 器械ヲ借リ愛倫ニ歸テ兵ヲ舉ク時ニタルボット
 尚愛倫ノ都督ト為リ其政事務メテ新教ヲ抑ヘ
 舊教ヲ助クルニ因テ島人多クハ皆舊教ノ徒ニ

シテ最意ヲゼームスニ屬シ其至ルヲ聞テ翕然
 歸向シ降ラサル者ハ唯、ロンドン、デール、リー、エン
 ニスキル、レン、ノ、二、邑ナリゼームス自將トシテ
 ロンドン、デール、リーヲ圍ミシカゼームスノ兵ハ
 一時ノ烏合ニシテ能ク小銃ヲ携フル者ハ百中
 ノ二三ニ過キス加フルニ城兵精悍ニシテ善ク
 禦キシカハ急ニ城ヲ拔クコト能ハスゼームス
 則其將ローセンヲ留メテ長圍ノ計ヲ為シ自ラ
 ジブリンニ退キシカ既ニシテ英將キルクノ来
 リ救クニ逢ヒ是秋攻兵遂ニ營ヲ燒テ解走ス○

是歲夏蘇格蘭北部ノ小民ゴールドンノ侯ヲ擁
 シテゼームスノ為ニエジンボロー城ヲ奪ヒ別
 ニドンジート云フ者二千餘人ヲスチルリング
 ニ聚メテ大ニ官兵ヲキルクランキーノ山中
 ニ破レリ然レトモ六月十三日エジンボロー降
 ラ請ヒキルクランキーノ役ドンジート亦大傷
 ラ被テ七月十三日遂ニ死ス故ニ叛徒氣ヲ奪ハ
 レ北方頓ニ鎮靜ス○是ヨリ先王ノ位ニ昇ルニ
 當テ公會又臣民ノ諸權義ヲ申明シ且傳位ノ順
 ヲ定メテ之ヲ王ニ止リシカ是歲十月議院ヲ開

クニ及ヒ其書ヲ増補訂正シテ律書中ニ増入ス
 此書題シテビブル、オフ、ライトト云フ亦英國古來
 大律ノ一ナリ○千六百九十年二月王議貞改撰
 ノ命ヲ下シ尋テ三月新徵ノ貢負都下ニ來會ス
 時ニ王愛倫ニ親征スルヲ以テ議院百二
 十萬ポンドヲ納レテ其軍資ニ供ス○是歲六月
 十四日王遂ニ愛倫ニ入ルゼームス王ノ來ルヲ
 聞キ軍ヲ悉シテ之ヲ禦キ兩軍ボイエン河ヲ隔
 テ、對陣セシカ七月一日王流ヲ渡テ攻メタリ
 シカハゼームスノ軍戰ハスシテ潰走シゼーム

ス獨ジブリンニ遁走ス斯テゼームスは止ル
 コト數日敗兵未聚ラサハ王ノ軍既ニ近キニ
 在リシカハゼームス遂ニ佛ニ遁ル是ニ於テ王
 軍ヲ整ヘテジブリンニ入り尋テウクスホルド
 クロニメル等ノ數邑ヲ連下シ八月リメリッキヲ
 圍ルレカ拔クコト能ハス九月圍ヲ棄テ、英ニ
 旋師ス其後數日ヲ經テマルボローノ侯來テ之
 ニ代テ軍事ヲ領セシカ時既ニ寒ニ向フヲ以テ
 兵ヲ四方ニ用キルコトヲ得スコルク及ギンケ
 ルノ二邑ヲ陷レテ後又英ニ旋師ス○是時英人

佛ノゼームスヲ援クルヲ怒テ遂ニ兵ヲ起シボ
 イエンノ戦前一日英及和蘭ノ水軍合シテ佛人
 ト海上ニ戦フ然レトモ英軍利ヲ失ヒ退テテ
 ムス河ニ匿レケレハ佛人岸ニ上テテインマウ
 スヲ焚略ス○時ニ佛蘭二國ノ争未ダ止マス王歐
 洲諸國ト連盟シテ佛王ノ貪横ヲ挫カントシ千
 六百九十一年五月和蘭ニ至リ春ヨリ秋ニ至ル
 迄屢佛兵ト戦テ互ニ勝敗アリ十月ニ至テ又英
 ニ歸入ス○是歳ノ間英將ギンケルト云フ者愛
 倫ニ在テ屢佛將ムスト戦ヒ六月ギンケルアス

ロシヲ陷ル其後佛將丸ニ中テ死シ殘徒退テ再
 リメリッキヲ保シゼームスノ軍委靡シテ振ハス
 是ニ於テギンケル約束ヲ寬ニシテ敵ヲ誘降レ
 ケレハ土人悉佛軍ヲ棄テ、來降シ十月ニ至テ
 島内略平定ス是時ノ約ニ土人若去テ大洲ニ赴
 カシコトヲ欲スル者ハ政府其費ヲ辨レ船ヲ装
 テ之ヲ護送ス可レトノ條アリ故ニ亂平テ後叛
 徒佛國ニ流移スル者甚多ク此輩一万二千餘人
 佛王ノ募ニ入り後愛倫隊ト名ケテ驍武ヲ以テ
 稱セラル○千六百九十二年ジコビットノ黨人又

故王ノ復辟ヲ謀リマルボロ一等ノ諸將及近貴ノ大臣陰ニ之ニ加ハル者アリマルボロ一書ヲゼームスニ贈テ國ノ陰事ヲ告ケ且曰々王若國ニ返ラハ臣願クハ軍士ヲ率キテ駕ヲ迎ヘント其後王女アンモ亦書ヲ父ニ寄セテ深ク前罪ヲ悔謝シケレハゼームス乃佛王ノ兵ヲ借り愛倫隊ヲ合シテヘーグニ駐留レ日ヲ刻レテ英ニ入ラントス時ニ英王再和蘭ニ至テマリー一國ニ留守セリ海軍大將アドミラル多セルニ命シテ海防ヲ嚴ニセシム五月佛將トールビルゼームスノ軍ヲ載

セテ英ニ送ラント戦艦ヲ率キテブレストヨリヘーグニ赴キシカハ多セル之ヲ追テ十九日大ニヘーグノ海角ニ戦ヒ午時ヨリ晡時ニ至テ佛軍遂ニ敗走ス此役多セル以下諸將亦款ヲ敵ニ通シ其攻入ヲ待テ舉軍之ニ投セント約セリマリ一預メ之ヲ覺ルト雖敢ヘテ詰ラス書ヲ多セルニ贈テ曰ク近者道路ノ説ヲ聞クニ往々汝カ輩ヲ議スル者アリ然レトモ余ハ之ヲ信セス汝等勉メテ忠憤ヲ激マシテ衆疑ヲ散セヨト且多セルニ命シ將士ヲ集メテ之ヲ船中ニ讀マシム

是ニ於テ將士且愧テ且感シ志ヲ鬪シテ勇戦シ
 終ニ大勝ヲ獲タリ其後マルボロノ罪ヲ誅フ
 ル者アリ后一旦之ヲ獄ニ下シシカ明證ヲ得ル
 コト能ハス久カラスシテ又之ヲ放免ス○是ヨ
 リ千六百九十四年ニ至ル迄大洲ノ戦争悉皆王
 ニ利アラヌ時ニ日爾曼和蘭英國西班牙等ノ諸
 國連盟シテ佛王ルイスニ敵シ日帝レオポルド
 會盟ニ主タリト雖王ノ威名迥ニ其右ニ出テ戦
 守ノ權實ハ皆王ニ在リ然レトモ其智略亦佛王
 ノ敵ニ非ス千六百九十三年テミールノ圍ヲ解

クニ當テ王佛軍ノ為ニ破ラレ同九十四年又ラ
 ンデンニ戦テ再利アラヌ是歲英蘭等ノ商船四
 百餘艘英將ルーク戦艦ヲ以テ之ヲ護送シ佛將
 トールビールノ為ニ襲レテ商船軍艦八十餘艘
 ラ失フ是ニ於テ國人囂々トシテ王ノ不能ヲ責
 メケレハジャコビト黨人は際ニ乘シテ諸州ニ亂
 ラ為ス者少カラス六月英將タルマシ等王ノ命
 ヲ受ケテブレストルヲ襲ヒシカマルボロ又
 書ヲゼーナムスニ寄セテ密ニ其謀ヲ通知シケレ
 ハ佛人預其備ヲ為シ英人岸ニ上ルニ及テ劇シ

ク追撃ス英兵七千中生還スル者僅ニ千許人ノ
 ミ○是歳十二月后マリ痘ヲ病テ死ス后聰慧
 ニシテ才略アリ王和蘭ニ在リレ間毎ニ代テ政
 ヲ聽キ其國人ニ愛セラル、コト迥ニ王ニ過ク
 然レトモ其父ヲ逐テ恬然トレテ憂ヒス又其妹
 ヲ震スルコト頗少思ナルヲ以テ後世ノ譏ヲ免
 レスヘীগノ役後后グリーン多チノ離宮ヲ以
 テ創傷老病ノ者ヲ救養スル所トス海軍病院ノ
 制是ヨリ始マレリ○是ヨリ先キールス第一ノ
 世及共治ノ制ノ間三年ニ一タヒ議負ヲ改撰ス

ル法ヲ定ノレカキールス第二世ノ時以来又其
 制ニ遵ハス是歳公會中更ニ議定レテ三年一期
 ノ制ヲ復ス○千六百九十五年春又議院ヲ開ク
 此會中印行自由ノ令始メテ出タリ是ヨリ前ハ
 政府ニセシソルト名クル官アリテ國內發行ノ
 書籍ヲ檢視レ官許ヲ經ルニ非レハ猥ニ印行ス
 ルコトヲ許サス是ニ至テ其禁ヲ解キ其君上ヲ
 議リ或ハ政府ノ機事ヲ洩ス者ニ非レハ發允ス
 ルコトヲ得タリ然レトモ當時ノ人ハ此律ノ世
 ニ鴻益アルヲ知ラス其論スル所僅ニ書肆印工

ノ煩ヲ省クニ過キスト云又初メエドワルド第
 三世ノ時反逆ノ律ヲ定メ凡王及后或世子ヲ殺
 サント謀リ或ハ之ニ對シテ兵ヲ起シ或ハ后及
 世子ノ妃ニ奸スル類ヲ以テ反逆ト為シカ爾來
 大獄起ルコトニ黨人動モスレハ反逆ノ律ヲ濫
 用シ之カ為ニ冤枉ノ罰ヲ受クル者少カラス故
 ニ此會中其律ヲ増補シテ云ク凡反逆ノ獄起ル
 時ハ其糾彈ノ前五日證罪書ヲ以テ被告者ニ與
 ヘ又前二日陪審ノ名簿ヲ作りテ被告者ニ與ヘ
 且ツ原告被告共ニ代言人ヲ用キルコトヲ得ヘ

シト後五日ヲ變シテ十日トシ其後アソノ世ニ
 至テ又之ニ増加シテ糾問ノ前十日被告者ヲシ
 テ其證人ノ名ヲ知ラシム可シトノ一條ヲ加入
 セリ是ヨリ反逆ノ獄大ニ嚴重ヲ増シテ被告冤
 枉ヲ防ク便ヲ得タリ○千六百九十六年ノ間故
 王ノ黨人又王ヲ刺殺セント謀ル者アリ二月十
 五日王ノ出テ、遊獵スルヲ窺ヒ途中ニ埋伏シ
 テ事ヲ舉ケント擬セシカ期ニ先ダテテ叛徒中
 ノ一人其事ヲ自首シケンハ叛徒大抵戮ニ就キ
 タリ是時叛徒中ノ一人ヘンキト云フ者頗マ

ルボロ一等ノ陰事ヲ知り其罪ヲ論證シテ自償
 ハント請シカ王又卻ケテ其言ヲ納レス○前年
 夏王又和蘭ニ往テ自ナミールヲ攻陷ス是ニ由
 テ佛軍ノ鋒勢大ニ挫ケ加フルニ佛ノ國力既ニ
 盡テ佛王密ニ和ヲ冀ヒシカ此歳ノ間佛軍益振
 ハス會盟ノ列國亦戰ニ疲レ遂ニレイス等キニ
 於テ和議ヲ講セシカハ王又和蘭ニ往テ之ニ臨
 ミ千六百九十七年九月和議成リ佛王等ルレム
 ノ英ニ王タルコトヲ許シ且ス左アルト氏ヲ逐
 ハント約ス○是歳王和蘭ヨリ歸テ後議院兵ノ

一旦止ムヲ以テ軍士ノ數ヲ減セント議ス然レ
 トモレイス等キノ和後佛王未ゼームスヲ逐ハ
 ス且諸國ノ争端未定ヲサレテ以テ王和議ノ久
 シカラスシテ又破レンコトヲ知テ其議ニ從フ
 コトヲ欲セス千六百九十八年新徴ノ議貞公會
 ヲ開クニ及テ遂ニ軍士七千人ヲ留メテ其餘ヲ
 解遣シ且常備ノ兵ハ皆英人ヲ用キルヘシトテ
 悉和蘭ノ兵ヲ放逐ス王之ヲ争ヘトモ聽カス是
 ニ於テ王大ニ怒リ又和蘭ニ歸ラントセシカ適
 之ヲ諫ムル者アリテ果サス又初ゼームスノ愛

倫ヲ去テヨリ土人或ハ罪ニ坐シ或ハ流亡シテ
 其土地官ニ入ル者極メテ多シ王之ヲ以テ其寵
 臣ニ封與セシカ是ニ至テ議院其土地ハ皆政府
 ノ用ニ充ツ可キコトヲ言テ再之ヲ没官セシカ
 ハ之カ為ニ産ヲ失フ者和蘭人最多シ然レトモ
 下院其議案ヲ以テ獻納ノ金ニ代ヘントスルニ
 因テ王之ヲ拒ムコトヲ得ス遂ニ意ヲ枉ケテ其
 請ニ從ヒ尋テ議院ヲ閉鎖ス○時ニ西班牙王
 ルス第二世老且病テ子ナシ日帝レオポルドノ
 子キールス佛王ノ子ルイス及バハリア部長ノ

子ジヤセフ并ニ連姻ノ故ヲ以テ位ヲ繼ク可キ理
 アリ然レトモ英主ノ首トシテ各國ノ君主佛日
 等ノ益強大ナランコトヲ慮テ西ノ一國ニ折入
 スルコトヲ好マス故ニ是歳十月王又和蘭ニ往
 テ佛王トロロニ會シ密ニ佛王ニ説テ西國ヲ三
 分シ三子ヲシテ各其一ヲ保タシメント約セシ
 カ翌年春ジヤセフ病ヲ以テ死セシニ因テ其約行
 ハレス千七百年改メテ新約ヲ設ケキールス及
 ルイスノ二人西國ヲ分取センコトヲ約ス然ル
 ニ西王及其國人西國ノ分割セラレントスルヲ

聞テ深ク英王ヲ怒ミ日帝モ亦頗ル此議ヲ甘セス
 是歳十一月西王死ニ臨ミ遺命ニテ國ヲ佛國世
 子ノ弟二子アンヅーノ侯ヒッポニ傳ヘシカハ
 日帝怒テ別ニ其子キールスヲ立テ、遂ニ佛國
 ト兵ヲ構フ世ニ此亂ヲ西班牙繼統ノ亂ト云フ
 ○王ノ初年議院繼統ノ順ヲ議シ噫馬ノ后アン
 ラシテ王ニ繼カシメ世次ヲ以テ其子孫ニ及ホ
 サント定メシカ千七百年七月アンノ一子グロ
 ーストールノ侯病ヲ以テ死シケレハアンノ死後
 位ヲ繼ク可キ者ナシ是ニ於テ千七百一年ノ會

中ニ院繼統ノ律ト名クル者ヲ作テゼームス第
 一世ノ外孫ハノーブルノソヒアヲ其後嗣ト定
 メ且數條ノ例制ヲ其後ニ附シテ曰ク爾後英王
 ノ位ヲ踐ム者ハ必國教ノ徒ナルヘシ他邦ノ人
 來テ國統ヲ繼クコトアリトモ公會ノ許可ヲ經
 ルニ非サレハ國人ヲ驅テ他邦ノ戰ニ役ス可ラ
 ス後來ノ君主ハ公會ニ謀ラスレテ國ヲ離ルヘ
 カラス他邦ノ入ハ王ヨリ官職土地ヲ得ルコト
 ヲ許サス又公會中ノ議負タルコトヲ許サス官
 ニ處リ其他王ノ俸養ヲ受クル者ハ下院ノ議負

タルコトヲ得ス諸刑法ノ官吏ハ王安ニ之ヲ黜
 罰スルコトヲ得ス以テ斷獄ノ者ヲシテ法ヲ曲
 ケ王ニ諛ル弊ナカラシム諸種ノ罪犯下院ヨリ
 之ヲ訴フル時ハ王之ヲ回護スルコトヲ得スト
 其後官吏下院ノ議負タル一條ハ稍嚴ニ過クル
 ヲ以テ千七百六年之ヲ廢シ改メテ下院中ノ一
 員タル者若王ヨリ官ヲ受クル時ハ一旦院中ヲ
 退キ他員ノ評定ヲ待テ再加入スヘシトノ文ヲ
 加フ其他君主國ヲ離ル、條モ亦ゼオルジ第一
 世ノ時ニ廢セラレ餘ハ今ニ至ル迄皆法制ト為

レリ英政沿革記ニ詳也 ○是歲九月十六日故王ゼームス
 佛國ニ死ス時ニ年六十五英王ノ位ニ在ルコト
 四年位ヲ逐ハレテヨリ凡、十三年ナリ ○ゼーム
 ス死ニ臨テ佛王其病ヲ訪ヒ之ニ告ケテ曰ク子
 ノ死後余必子ノ子孫ヲ棄テントゼームス死シ
 テ後遂ニ其子ヲ立テゼームス第三世ト稱シ且、
 國內ニ令レテ奉スルニ英王ノ禮ヲ以テセシム
 英人之ヲ聞テ怒ルコト甚シ初、千六百九十八年
 ノ公會以來王常ニ議院ト協ハス西班牙分地ノ
 條約殊ニ國人ノ情ニ反戾ス之ヲ以テ歐洲諸國

既ニ兵端ヲ開クト雖王ハ唯少許ノ兵ヲフラン
 ドルスニ出スノミニテ其事ニ與ルコトヲ得ス
 然ルニ佛王ゼームスヲ擁立スル報至ルニ及テ
 國論俄ニ一變シ是歲十二月議院聚會スルニ當
 テニ院翁然トシテ議シテ曰ク佛王過ヲ謝シ辱
 ヲ償フニ非レハ誓テ兵ヲ息メント是ニ於テ直
 チニ水陸軍士ヲ全備シ軍資六十万ポンドヲ王
 ニ納シテ佛國ノ罪ヲ問ハシム○千七百二年二
 月王ケンチントンヨリハンプトンノ離宮ニ至
 ル途中馬ヨリ墜チテ胸ヲ傷リ三月八日瘡痍ノ

為ニ遂ニ死ス時年五十二在位十三年ナリ子ナ
 シニ繼續ノ律ニ從ヒ連馬ノ后アンヲ以テ位ヲ繼
 カシム○王在位ノ間内外ノ戦争多事ニシテ國
 用給セズ其晩年ニ至テ貴族或ハ巨農ヨリ政府
 ニ假借スル所ノ金千七百餘万ポンドニ至ル是
 ヨリ先歷代ノ間大事故アルニ臨テ君主臣民ノ
 金ヲ借ルコト間多シト雖皆君主ノ私債ニシテ
 償還ノ期ヲ立ツルコト尋常ノ貸借ニ異ナラス
 王ノ世ニ及テ政府ノ費用始メテ公私ヲ分チシ
 ヨリ其負フ所皆國ノ公債トシテ國債ノ名始メ

テ起リ是ヨリ數年ノ後次第ニ増加レテ方今ハ
 殆七億五千萬ノ多キニ至レリ
 方今ノ制金ヲ政
 年コトニ其利子ヲ收ム其母金償還ノ期ナシト
 雖財主若シテ得ンコト欲セハ證券ヲ他入ニ
 賣與スルコトヲ得タリ故ニ財主ニ在テハ金ヲ
 銀行ニ托スルト其理一般ニ利子ノ期ヲ愆
 タサルニ至テハ更ニ便宜ナリ然レトモ近來數年
 間ハ國債ノ利銀及其經費ヲ合シテ大凡年々二
 千八九百萬ポンドニ下ラズ此金ハ賦歛ヲ厚ク
 レテ之ヲ民ニ取ラサレトス故ニ近世ノ
 政事家意ヲ悉レテ國債消除ノ法ヲ設クモ
 随テ減スレハ隨テ増レ其數年ヲ逐テ益累積セ
 リ
 ○方今内閣ノ制モ亦是王ノ世ニ創レリ古昔
 封建ノ制行レシ時ヨリ議院ノ外ニ樞密院ト名
 クル者アリ其負ハ貴族高僧ノ類ヲ以テ之ニ充

テ大事アル時ハ王之ヲ會レテ顧問ニ備ヘシカ
 テールス第一世ノ時又別ニ一局ヲ開テ機事ヲ
 議スル所トシ王ノ世ニ及テ其制始メテ備レリ
 方今内閣ノ員タル者ハ諸省ノ長官及其他
 セロル前卷中往々相國ト譯セル者是ナリ然レ
 等數名ノ大臣ニシテ王ノ政事ヲ補佐ス樞密院
 モ亦匡輔ノ一院ニシテ現今ハ其數二百員ニ超
 エレトモ之ヲ會スルコト漸ク少レナリ○俄羅
 斯帝ベートル第一世ハ此王ト同時ナリ其諸國
 周遊中暫ク英ノ造船廠ニ寄寓シ船艦製作ノ事

ヲ習練セリ

アン王ハゼームス第一世ノ第二女ニシテ噀馬ノ王ゼオルジニ嫁セシカ先王子ナキラ以テ後嗣トナリ千七百二年三月八日王死シテ即日位ニ昇リ四月二十三日即位ノ禮ヲ行フ王ハ材質凡庸ニシテ人ノ為ニ制セラレ易ク其噀馬ノ后タリシ時ヨリ厚クマルボロノ侯夫妻ニ交リシカ位ニ即テ後亦深ク其妃ヲ寵シ常ニ二人ノ制ヲ受ク○王亦先王ノ遺志ヲ繼テ大ニ兵ヲ大洲ニ用キシトス時ニ日爾曼和蘭ノ二國佛王ニ

敵レテ佛國西班牙及バハリヤノ兵ト戦ヒ日爾曼フランソワ等首トシテ戦地ト為リシカハ是歳七月王マルボロノ侯ヲフランソワニ遣リ之ニ加ラシム時ニマルボロノ雄略諸軍ニ冠タリマルボロ三國ノ兵ニ將トシテ是歳ベンローリヌレモンデ及リージノ三邑ヲ陷ル○是歳英將ルーク英蘭二國ノ軍艦ニ將トシテ西班牙ノ貨船ヲビゴニ襲ヒ其六艘ヲ奪ヒ七艘ヲ沉メ九艘ヲ焼焚ス其八月ベンボクト云フ者西印度ノ軍艦ニ將トシテ佛軍ト戦テ利アラ

ス其七艘ノ中五艘ヲ失ヒベンボウ亦創ヲ被ラ
 死ス○千七百三年五月マルボロー又ボロンヲ
 圍テ之ヲ取り是ヨリヒーイリンベルグ等ノ數
 城ヲ連下ス其他春ヨリ冬ニ至ルマテ海陸屢戰
 アリト雖大事ノ記ス可キ者ナレ○千七百四年
 日帝レオボルド佛軍ノ為ニ迫ラレ加フルニホ
 ンガリア人ノ亂ヲ起スニ會テ頻ニ英國ノ援ヲ
 求ム因テ是歲首夏マルボローライン河ヲ渡テ
 タニーブ河畔ニ至リ率ンテルステルレンニ日
 爾曼ノ軍ト合レテ七月二日敵ノ一城ヲ攻陷シ

敵將バハリア部長ノ北タルヲ逐テ又オーグス
 ボルクニ向フ是ヨリ先佛ノ大將タルラドト
 云フ者日將ユージェントタニフノ上流ニ對陣セ
 レカタルラド其軍ヲ拔テ下流ニ赴キケレハ
 ユーゼンモ亦其後ニ躡レテ下流ニ赴キ是ニ至
 テ各下流ノ軍ト合レタリ時ニ兩軍各六万許人
 敵軍ブレンヘームノ村落ヲ前ニレ高處ニ陣ヲ
 布キ茂林沼澤ヲ左右ニ控ヘテ頗要害ヲ得タリ
 然レトモタルラド誤テブレンヘームヲ要衝
 ノ争地トシ銳ヲ悉シテ之ヲ守リレニヨリテ中

軍甚空虚トナリ八月十三日戦稍久シクレテマ
 ルボローノ侯遠ニ高處ヲ奪テ陣ヲ移シケレハ
 敵軍中斷シテ相應援スルコトヲ得スバハリ
 ノ部長先左軍ヲ率キテ退走シケレハブレ
 イムノ全軍一万二千皆降ラセヒタルラドモ
 亦虜ニ就キタリ此役佛軍死スル者一万二千人
 創ヲ被リ及河中ニ溺ル者數ヲ知ラス戦後バ
 ハリアノ部長國ヲ棄テ、涅泥蘭ニ逃走シテ日
 爾曼地中海全ク佛軍ナシ○是歳英將ルーク軍艦
 ヲ以テ日爾曼ノギールスヲ葡萄牙ニ護送シ其

歸途七月二十二日ジブラルタルヲ襲テ之ヲ陷
 没スジブラルタルハ西班牙南岸ノ一堅城ニシ
 テ地中海ノ口ヲ楹シ四面峻絶海面ヲ抜クコト
 百六十丈其海峡モ亦ジブラルタルト名ケ其濶
 ナ僅ニ數里ニ過キス地中海中ノ一大要地タリ
 是ヨリ先西人常ニ兵ヲ置テ之ヲ守リシカル
 ク警兵ノ怠ルヲ見テ急ニ襲テ之ヲ攻取ス是歳
 秋佛軍西人ト共ニ來テ之ヲ環攻セシカ終ニ回
 復スルコト能ハス是ヨリ永ク英ノ所有タリ○
 千七百五年ペートルボローノ侯其陸軍ヲ率キ

グロ―デスレ―ノ軍艦之ヲ載セテカタロニア
 西班ノ海岸ニ至リ連ニ城砦ヲ攻下シ海岸ノ數
 州ヲ奪フ然レトモ和蘭ニ於テハ國人マルボロ
 ーニ請テ專國界ヲ防守ス之ヲ以テ侯自遠方ヲ
 征スルコトヲ得ス其他以多利日爾曼等ノ戰事
 是年ノ間概シテ皆佛ニ利アリ○千七百六年ノ
 間マルボロ―又和蘭ノ壇上ヲ守テ廣ク兵ヲ用
 キス三月二十三日佛將ビルレロ―イトナルモ
 ントノ近傍ヲミルリスニ戰テ大ニ勝チ佛軍
 死傷一万四千遂ニ勢ニ乘シテゴフバンド及
 フ

ランドルス中西班牙ノ屬地ヲ裁定ス○是歲日
 將ユ―ゼンモ亦サポ―イノ侯ト共ニ大ニ佛軍
 ヲ破リ又英將ル―ク水軍ヲ以テ
 マヅルカ及イビカ并ニ西ノ二島ヲ征服ス○西
 班牙ニ於テハガル空―ノ侯等英葡二國ノ兵ヲ
 以テマドリットニ進ミセリゴフ都ヲ棄テビルゴス
 ニ遁走セシカ既ニシテガル空―守衛ニ怠リ又
 ベルキノ侯ノ為ニ都城ヲ回復セラルベルキ
 キハゼ―ムス第二世ノ庶子ニシテ是時佛王ノ
 軍ニ在テ其一方ノ將トナレリ○王ノ登極以來

循舊就新二黨ノ爭論日々劇シク二黨ノ中マタ
 支分シテハハノレブル氏繼統ノ議ヲ固執スル
 者アリ又之ヲ拒テ故王ノ統ヲ復セントスル者
 アリ殊ニ蘇格蘭ハゼームス第一世ノ時ヨリ英
 ニ併セ二國一王ヲ奉スト雖尚其國ノ法律アリ
 其國ノ公會アリテ別ニ自國ヲ成シテ英王ハ唯
 其位ヲ攝スルニ過キス故ニ繼統ノ律定マリレ
 時蘇ノ公會ニ於テハス左アルト氏ハ蘇格蘭古
 來ノ王統ナルヲ以テ之ト終始ス可キコトヲ論
 シ大ニ其議案ニ抗セシカ是ニ及テ其論愈劇シ

ク千七百四年其公會中遂ニ一事ヲ定メテ曰ク
 今王ノ死後蘇格蘭ハ別ニ一王ヲ撰テ再英ト分
 立セント是ニ於テ英國上院怒テ英蘇二國ノ通
 商ヲ絶チ且海軍ニ命シテ蘇國ヨリ佛ニ貿易ス
 ル所ノ諸船ヲ抑留ス可キ令ヲ發セシカハ二國
 相睥睨シテ物情頗穩ナラス王以下當路ノ大臣
 之ヲ憂憲シテ英蘇ノ公會ヲ合併シ二國一ニ歸
 セハ度幾クハ此憂ヲ除カント使テ蘇格蘭ニ遣
 テ之ヲ議セシム時ニ佛王ノ軍屢敗レ蘇國英ノ
 議ヲ怒ルト雖佛ノ力ヲ借ルニ非レハ故王ノ統

ヲ復スルコト能ハス是ヲ以テ千七百七年一月
 其議遂ニ成リ盟約ヲ立テ、曰ク今ヨリ二國ヲ
 合シテ一トシ王位ハ永クハノーブル氏ニ傳ハ
 二國一公會ヲ設ケテ蘇ヨリ貴族十六名平民四
 十五名ヲ撰貢スヘシト是歳五月一日ヲ以テ二
 國合併ノ日ト定ム是ヨリ英蘇ヲ合稱シテ大不
 列顛ト名ク○千七百七年同盟ノ軍ミランヲ降
 シ佛軍以多利ヲ退キケレハ日將ユージェンサボ
 ーイノ侯ト共ニプロベンヌノ海岸ヨリ佛ノ境
 ニ入りグロデースレーノ水軍ト合シテ海陸ト

ーロンヲ環攻ス然レトモ城中兵食ニ富ミ加フ
 ルニ敵軍適来援ンケレハ遂ニ圍ヲ棄テ、退軍
 セリ時ニ佛王年老イテ兵事ニ倦ミ且佛軍ノ屢
 挫衄スルヲ以テ頻ニ兵ヲ熄ムルニ意アリ然レ
 トモ佛ノ請フ所愈卑シクシテ同盟諸國ノ求ル
 所愈驕リ千七百十一年ニ至ル迄其議數次ニシ
 テ皆完成セス此間互ニ勝敗アレトモ今詳記セ
 ス千七百八年マルボローオーデナルドニ於テ
 大ニ佛ノ軍ヲ破リ同九年九月マルプラタドニ
 於テ又大ニ之ヲ破リ同年十月モンスタ降シ佛

軍益振ハス而シテマルボロノ威名獨一世ニ
 高シ○ゴドルヒント云フ者王ノ即位ノ初ヨリ
 會計總裁ト為リマルボロハ軍務ヲ掌リゴド
 ルヒンハ國事ヲ掌リ二人相結テ國命ヲ執リシ
 カマルボロノ名聲朝野ニ振フニ及テ盛名ノ
 下遂ニ云々ナキコト能ハス千七百四年ノ頃ハ
 ルリー及セントジント云フ者二人始メテ内閣
 ニ入りマルボロト等一相軋リハルリ一終ニマ
 ルボロノ妃ヲ讒シテ王ノ寵ヲ奪ヒシカハマ
 ルボロ亦怒テ二人ノ過ヲ訴ヘ其官職ヲ褫フ

然レトモ千七百十年ニ至テゴドルヒン又黨人
 ノ為ニ中ラレテ其職ヲ去リケレハ朝中ノ大臣
 隨テ變更シ加フルニ此際循舊黨ノ說盛ニ朝野
 ニ行ルニ因テマルボロハ到處勢ヲ失ヒ是
 歳和蘭ヨリ歸ルニ及テ王及議院復之ヲ禮セス
 國人モ亦其功ヲ稱賛スル者ナシ○是ヨリ先^キ日
 帝レオポルド死シテ其長子ジセフ位ヲ繼キ千
 七百十一年ジセフ亦死シテ其弟ギールス代テ
 日爾曼ノ帝タリ然ルニ是ニ至ル迄同盟諸國西
 佛二國ノ合併センコトヲ懼レカヲ戮セテ之ヲ

拒ミシカ今キールス日帝ノ位ニ昇リ且兼ネテ
 西班牙ニ王タラハ其害更ニ甚シカラントテ遽
 ニ日爾曼ヲ助クルコトヲ欲セス是歲十月遂ニ
 ユトレクト和蘭ニ於テ和ヲ結ヒ兵ヲ罷メンコト
 ヲ欲ス英國モ亦之ヲ先見シ且黨人マルボロ
 ヲ陷レントスレトモ辭ナキヲ苦シミケレハ相
 謀テ其功ヲ没セント頻ニ和議ヲ主張セシカハ
 マルボロ又歸テ之ヲ争ヘトモ其議行レス下
 院却テ其軍中ニ於テ貨ニ瀆ルハ罪ヲ鳴シ千七
 百十二年一月遂ニ其官職ヲ褫ヒ兵權ヲ解ス是

ヨリマルボロ快クトシテ樂マス其妃ト共ニ
 和蘭ニ往テ王ノ死ニ至ル迄アント左ルポニ住
 ヒレカ後ゼオルジ第一世ノ初年徵歸セラレテ
 舊官ニ復シ尋テ千七百二十二年病ヲ以テ死ス
 侯身ヲ微官ヨリ起シ大小數十戰終ニ上將ノ位
 ニ上ル其フランドルスニ在リシ間數國ノ兵ヲ
 併セ統ヘテ諸將見ヲ異ニシ議論紛起スト雖卓
 然トシテ群議ニ惑ハス良規ヲ授ケテ勝ヲ得セ
 シム然レトモ其性貪婪ニシテ貨財ヲ好ミ且畢
 生ノ間反覆常ナク初ゼームスニ反テ卒ルレム

ニ事へ奪ルレム位ニ昇ルニ及テ又アンニ結テ
 ゼームスニ通セシカアンノ即位後尚營々トシ
 テ故王ノ統ヲ復セシコトヲ謀レリ○マルボロ
 ノ侯罷ラレテ後オルモンドノ侯某代テフラ
 ンドルスノ軍ヲ領シ密ニ王ノ命ヲ受ケテ兵ヲ
 勒シテ戦ハス既ニシテ又其營ヲ移シ同盟軍ト
 相分レシカハ兵氣沮撓シ千七百十三年四月ユ
 トレクトノ和議遂ニ成リヒルプ西班牙本地及
 其殖民地ヲ取り日帝キールスミラニ子イブル
 ス及涅泥蘭ヲ取テ諸國兵ヲ罷ム其約中佛王英

國繼承ノ議ヲ許シテ故王ノ子ヲ逐ハンコトヲ
 約シ且英國ジブラタルミノルカ并ニ西ノバ
 スコチアセント、キリストーヘル并ニ亞ノ地等
 ノ新地ヲ得タリ○千七百十四年八月一日王死
 ス年五十在位十三年ナリ其間外國ノ戦虚歳十
 シト雖國內清肅ニシテ反逆謀叛等ノ事ナシ且
 王優柔ナリト雖國民ノ為ニ愛セラレテ善王ア
 ンノ名アリ是ヨリ前數月ハノーブルノソピア
 既ニ老イテ死セルヲ以テ其子ゼオルジヲ以テ
 位ヲ繼カシム

ハノール記 甲

ゼオルジ第一世 王ノ系ハゼーームス第一世ニ出
 ツゼーームスノ女エリサベッスラインノ部長フレ
 デリッキニ嫁シテソピアヲ生ミソピアハノール
 ルノ部長オーゴスニ嫁セリ即王ノ母ナリ
 王ノ父オーゴスニ嘗テブルンス寄キ且子ボ
 ルクノ侯タリ故ニ又王ノ家ヲ名ツケテブルン
 ス寄キト稱ス王立テ英王タル時年五十五歳ゼ
 ルノソピヤヲ娶テ一男一女アリ○ユトレクト
 ノ和議ハ固ヨリ全國輿論ノ歸スル所ニシテ其

事ハ實ニ善シト雖其意原黨人ノ徧私ニ出テ連
 年戦争ノ間英國最功アレトモ其得ル所僅ニ數
 地ニ過キス是ヲ以テ當時既ニ物議アリシカ王
 位ニ昇テ大臣黜陟セラレテ就新黨ノ人要路ニ
 當リシカハ千七百十五年公會ヲ開クニ及テ大
 臣下院中ニ建議シテ其事ヲ推究シ是ニ由テ罪
 ヲ得タル者オキスホルドボーリングブルク及オ
 ルモンド等數人アリ其中オキスホルドハ捕ヘ
 ラレテ獄ニ下リ他ノ二人ハ他國ニ出奔シボー
 リングブルクハロルレインニ至テゼーームスニ隨

フ○英佛ノ和議成リシ以來ゼームス佛ヲ去テ
 ロルレインニ在リ千七百十五年ギコビト黨人
 又之ヲ迎ヘテ英ニ入レント謀リマルノ侯ハ蘇
 格蘭ニ起リホストルト云フ者ハ英ノ北部ニ起
 テ凶徒ヲ嘯聚ス然レトモ二人共ニ厄弱ニシテ
 兵ヲ知ラス十一月十三日ホストルハ官兵ノ將
 カルペントルニ降リ是日マルモ亦アルジール
 ノ侯ニ破ラル尋テゼームス自蘇格蘭ニ上陸セ
 シカ大事既ニ去ルヲ以テ翌年二月又佛ニ遁レ
 シカ時ニ佛王ルイス第十四世既ニ死シテ曾孫

ルイス第十五世位ヲ繼キ其尚幼ナルヲ以テオ
 ルリーンスノ侯某政ヲ攝ス侯スチアルト氏ヲ
 援クルニ意アラス其後新ニ英ト盟ヲ結ヒ好ヲ
 修シケレハゼームス又佛ニ在ルコトヲ得ス去
 テ羅馬ニ住ス是ヨリスチアルト氏ノ勢益衰フ
 ○千七百十六年又議負改撰ノ期ヲ改メテ七年
 トス時ニゼームスノ亂後物情未定ラス政府
 コビト黨人ノ其間ニ乘レテ撰ヲ得ンコトヲ懼
 レテ其期ヲ緩クセシナリ凡政府ニ於テ公會ヲ
 設ケサレハ政事批弊多ク君主因テ自擅ヲ得ル

カ故ニ議負代任ノ期ハ短促ヲ善トシテ修緩ヲ善トセス七年一期ノ法ハ稍緩ニ過クルヲ以テ後來屢舊ニ復ヤント謀ル者アリト雖其議今ニ至ル迄行ハレス然レトモ方今ノ制議院ヲ開ク毎ニ下議唯一年ノ度支ヲ納ル、カ故ニ翌年ニ至テ王又之ヲ開カサルコトヲ得ス其實ハ年々議負ヲ改撰スルト同義ニシテ永ク公會閉鎖ノ憂ナレ近来ハ歲首半年ノ間會ヲ設クルヲ通例トス○是歲瑞典王連馬トブレメン及ベルゲンノ兩地ヲ争ヒ連馬王其保ツ可カラザルヲ測リ

之ヲ英ニ讓テ共ニ瑞典ニ敵セント請フ是ニ於テ是歲秋王兵船一隊ヲ裝テバルチック海ニ發遣シケレハ瑞典王查理ス之ヲ怒ミ陰ニジャコビト黨ヲ啖レテ英國ヲ擾ラントス然レトモ英國早ク之ヲ覺リ瑞國公使ヲ執ヘテ之ヲ逐ヒシニ因テ幸ニシテ事ナキコトヲ得タリ此間頗爾猜疑ニ渉ル者アリ愛倫ノ都督タタンセンド官ヲ罷メラレ其他内閣中リ大臣亦多ク職ヲ去リスタシホープト云フ者代テ會計總裁ト為リ是ヨリ首トメ國事ヲ領ス○千七百十八年西班牙王ヒ

リ、再兵ヲ起シテ 西里ヲ脅シ 其相アルベロ
 ニ、ト云フ者 瑞典及俄羅斯ト結テ 又陰ニス
 アルト氏ヲ助ク是ニ於テ スタンホープ 巴勒
 往テ 佛日蘭ト連盟シ 八月十一日 英ノ水師提督
バイン 西ノ水軍ヲ パッサロ海角ニ破テ 其彈藥貨
 物ヲ奪フ ○千七百十九年 西人ゼームス マド
リトニ迎ヘ 大ニ 戦艦ヲ發シテ 英ニ入レント 擬
 セシカ其船 ビスケイ灣ニ至テ 颶風ニ遭ヒ 飄蕩
 覆没殆子遺ナシ既ニシテ 西相アルベロニ 罷
 ラレ 瑞典王キールス 亦病ヲ以テ死セシカハ千

七百二十年春諸國成ヲ行ヒ兵ヲ罷ム ○千七百
 二十一年 スタンホープ 死シ ワルポールト 云フ
 者代テ事ヲ用キル ワルポール ハ賢能ニシテ無
 事ヲ好ミ勉メテ 貿易ヲ興シ 隣交ヲ修セリ 是ヲ
 以テ 王ノ晩年ノ間内外甚無事ナリ ○千七百二
 十七年 王ハノーブルニ至リ 途ヨリ病ヲ得テ六
 月十一日 オスナブル ハノール 至テ 駕中ニ死
 ス時ニ年六十八在位十三年ナリ 王容貌醜惡 又
 文學ヲ好マシ其英ニ來テ 後國語ニ通セサルヲ
 以テ 大臣ト言語スルニ往々羅甸語ヲ以テ スト

云フ又家内親睦ナラス長子ゼオルジト釁アリ
 又后ト協ハス英ニ入ル前ヨリ后ヲ執ヘテアル
 デン城ハノールニ禁錮シ前後殆四十年王死スル
 前數月遂ニ獄中ニ死ス相傳フ后死ニ臨ミ書ヲ
 王ニ寄セテ曰ク令ヨリ一年ノ内子ヲ上帝ノ廳
 ニ呼テ共ニ曲直ヲ決セント王ハノールブルニ至
 ル途中ニ於テ其書ヲ得テ驚悸シ因テ病ヲ成シ
 テ死スト云フ

ゼオルジ二世 六月十四日先王ノ赴音倫敦ニ
 至リ翌日王位ニ昇ルワールポール政ヲ執ルコト

故ノ如シ王ハ先王ノ長子ニシテ時ニ年四十五
 歳アンスパクノカロリンヲ娶テ二男四女アリ
 王ハ容貌端嚴ナリト雖氣局其父ニ及ハス后カ
 ロリン才略アリテ能ク其夫ヲ制シ加フルニ正
 ハノールブルヲ愛シ多ク英ニ在ラサルヲ以テ政
 權皆后ノ手ニ在リ○千七百三十七年十一月后
 カロリン死ス后賢明ニシテ且容儀アリ自才カ
 ニ任スルヲ以テ牝鷄ノ譏アルコトヲ免レスト
 雖王ヲ輔ケ政ヲ為シテ其功居多ナリ初王位ニ
 昇テワールポールヲ罷メントセシ時后其才能ヲ

知リ王ニ勸メテ復之ヲ用キシメシカ后死シテ
 後ワルポールノ言多ク用キラニス是ヨリ外交
 漸ク多事ナリ○千七百三十九年英國西班牙ト
 西洲ノ貿易ヲ争テ兵ヲ構ヘ千七百四十年英ノ
 水師提督ベルロ港西亞ノ地名ヲ攻メテ之ヲ取り
 翌年又カルサシナヲ攻テ英軍敗走ス千七百四
 十年アンソント云フ者數艘ノ船ヲ率キテ西ノ
 高船ヲ海上ニ劫カシ、カ又大ニ獲ルコトナシ
 初西班牙ノ事起リシトキワルポール獨戰ヲ好
 マサレトモ意ヲ曲ケテ衆議ニ從ヒシカ戰事意

ノ如クナラサルニ至テ國人往々其無能ヲ責ル
 者アリ下院中ノ一員卒ルレム、ピットト云フ者首
 トシテ其政ヲ譏リ千七百四十一年ノ公會ニ至
 テワルポトルノ議論益行ハレス千七百四十二
 年ワルポール遂ニ官ヲ辭ス○千七百四十年日
 爾曼キールス第六世死シテ其女マリア、ゼレサ
 バハリアアノ部長キールスト墾地利ノ位ヲ争ヒ
 佛國キールスヲ援ケテビーンナニ攻入セシカ
 ハマリアアホンガリニ遁走シテ英國ノ援ヲ請
 フ是ニ於テ千七百四十二年英國ステイルノ侯

某ヲ一万六千ノ兵ニ將トシテ大洲ニ遣リ和蘭
 ト策應シテマリアヲ位ニ復セントス○千七百
 四十三年王其次子コンベルランドノ侯ト共ニ
 ハノーブルニ往キ尋テアスカヘンボルグニ至
 テステイルノ軍ヲ統フアスカヘンボルグハマ
 イン河畔ノ邑名ナリ時ニ英軍山河間ノ狭地ニ
 陣シテ糧道四塞シ佛將ノアイルレス大軍ヲ以
 テマインノ前岸ニ在リ六月二十七日王一旦ハ
 ノーニ退カントシ軍ヲ分ケテ二隊ト為シ自後
 軍ヲ領シテアスカヘンボルグヲ發セレカハ佛

將又兵ヲ分ケテダチンゼンニ據テ以テ前路ヲ
 絶チタリ然レトモ敵將衆ヲ恃テ輕進シ險ヲ離
 レテ英軍ヲ襲ヒシカハ英軍劇戦シテ遂ニ大勝
 ヲ獲佛軍死傷六千人英軍ノ死傷ハ其半ニ及ハ
 ス遂ニハノーニ達スルユトヲ得タリ○ダッチン
 ゼンノ役王コンベルランドノ侯ト共ニ自陣頭
 ニ進テ奮戦指揮シ頗勇名ヲ得タリト雖其ハノ
 ーブルヲ偏愛スルヲ以テ國人王ヲ悦ハス時ニ
 ゼームス羅馬ニ在テ年既ニ老イ其子キールス
 エドワルド狀貌魁偉ニシテ大志アリ英國ノ人

心乖離シ戰事暇ナキニ乘シテ又恢復ヲ謀ラン
 トシ千七百四十四年二月大ニ佛ノ兵艦軍士ヲ
 借テドンキルクヨリ發セシガドンゼ子スノ海
 面ニ至テ颶風ノ為ニ艦ヲ破ラレテ皆英ノ地ニ
 達スルコトヲ得スシテキールス又巴勒ニ歸住
 ス是ヨリ佛人復大ニスエアルド氏ヲ助ケス○
 千七百四十五年五月佛軍七万六千ホントノ
 イノ近傍ニ陣スコンバルランドノ侯英國和蘭
 ハノールノ兵五万ヲ合シテ之ヲ襲フコンバ
 ルランド敵ノ二隊ヲ破テ直ニ佛王ノ麾下ヲ擣

キレカ適和蘭ノ軍俄ニ潰走セシニ因テ餘軍全
 キコトヲ得ス同盟ノ軍死スル者九千人英人兵
 ヲ收メテアスニ退キ佛軍隨テトールノイーゲ
 ントブリゼス等ノ數邑ヲ陷ル○キールス、エド
 ワルド巴勒ニ歸テ後佛ノ援ヲ失フト雖未英ニ
 入ル念ヲ絶タス千七百四十五年冠飾寶器ヲ典
 レテ僅ニ軍器ヲ辨シ又佛王ニ説テ其戰艦二艘
 ヲ借り七月愛倫ヲ廻リ蘇格蘭ノ西北ニ向テ航
 セレカ其途中英國哨船ノ為ニ追レテ其一艘ヲ
 失ヒ十六日纔ニ七人ヲ從ヘテロカベルニ上陸

然レトモ、チャールズ意氣撓マ、ス北部ノ大族カ
 メロント云フ者ノ來歸スルニ會テ數百人ノ兵
 ヲ得九月三日進テペルスニ至リ此地ニ止マル
 コト數日又馳セテエジンボロニ至リ十七日
 遂ニ都府ニ入テ其父ヲ冊立シゼームス第八世
 ト称ス時ニ王ハ太子コンベルランドト共ニハ
 ノーブルニ至リ軍士多ク之ニ從行レテ甚ク内國
 ノ備ニ乏シク蘇格蘭ノ鎮兵僅ニ三千人ニ滿タ
 ス留守ノ大臣警ヲ聞テ大ニ驚キ使ヲ走セテ王
 ヲ迎ヘ又所在ニ令レテ兵ヲ募ルト雖事皆急ニ

辨スルコト能ハス是月二十一日鎮兵ノ將ヨッ
 其兵ヲ率キテ都府ニ迫リレカチャールズ邑外ニ
 出テ之ヲ逆ヘプレストンニ戰テ大ニ其兵ヲ
 破リタリ是ニ於テチャールズノ兵二千五百且ヨ
 プノ大砲彈藥ヲ奪テ遠ニ武器ニ富ミ加フルニ
 佛國大兵ヲ發シテ來援セント約セレカハチャ
 ルズ遂ニ兵ヲ引テ南向レ直ニ倫敦ヲ擣カント
 ス或人其輕進災ヲ取ルヲ諫メ持重レテ得ル所
 ノ地ヲ守ラント請ヒレカチャールズ之ヲ聽カス
 レテ曰ク今日ノ勢全土ヲ得ルニ非スハ必全土

ヲ失ハント十一月遂ニ進テ英境ニ入リコンベ
 ルランドヲ經テマンチヌストルニ出テ十二月四
 日デルビーニ至テ軍ヲ駐メ時ニ王既ニ變ヲ聞
 テ馳セ歸リ諸方募ニ應スル兵隊ニ一ケスル及
 ピンチレリー等ニ屯スル者數万ニ及フト雖モ
 ルス巧ニ其鋒ヲ避クルヲ以テ皆之ト會戦スル
 コトヲ得ス是ヨリ倫敦ニ至ル迄纔ニ四日程ヲ
 リ倫敦震駭シ都人亂ヲ避ケテ負擔奔走シ滿都
 騷然タリ然レトモモテールスノ軍深ク敵境ニ入
 テ人々危懼ヲ懷キ期ニ及ヘトモ佛人亦來援セ

ス且諸酋長頻ニ歸ヲ思テ退軍ヲ促カシケレハ
 テールス已ムコトヲ得スシテ軍ヲ旋シベジリ
 スニ至ル比ニコンベルランド追躡シ來リケレハ
 反戦シテ其兵ヲ破リ千七百四十六年一月スチ
 ルヤングニ至テ其城ヲ圍ミ又其援兵ヲ破リシ
 カ遂ニ城ヲ拔クコト能ハス尋テインベル子ス
 ニ退キ諸酋長春初雪消スルヲ待テ再來會セン
 ト約シテ各其郷里ニ散歸ス○千七百四十六年
 四月八日コンベルランドノ侯兵ヲ率キテアベ
 ルジーンヨリ發シテインベル子スヲ攻メント

ス時ニチャールスノ軍未集ラスチャールス先發シ
 テ之ヲ掩撃セント夜ヲ犯シテインベル子スヲ
 發セシカ途上沮洳卑濕ニレテ行軍濡滞シ未
 ンバルラントノ軍ニ達セスレテ夜既ニ明ケタ
 リ是ニ於テチャールス軍ヲキュルロイデンニ駐メ
 敵ヲ待テ戦ヲ始ム斯テ兩軍既ニ交ハルニ及テ
 チャールスノ將モルレ一先進テ敵ノ一軍ヲ擣破
 シ轉シテ第二陣ニ逼リシカニ陣其隊ヲ編シテ
 三列トシ一列跪坐シ前後遞發セシカハ彈丸雨
 集シモルレ一ノ兵死傷數ヲ知ラスチャールスノ

軍遂ニ大ニ敗レチャールス獨軍ヲ棄テ山中ニ
 遁匿ス其後チャールス飢寒困踣スルコト殆_ト五月
 其間或ハ山洞ニ蟄居レ獸ヲ捕テ餓ニ充テレコ
 トアリ後九月ニ至リ遂ニ一船ヲ得テ又佛ニ遁
 ル是ヨリチャールス遊蕩ヲ事トレテ喜怒測ラレ
 ス世人ニ棄捐セラレテ千七百八十八年遂ニ羅
 馬ニ死ス是ヨリ先其父ゼームス既ニ老病ヲ以
 テ死シチャールス一弟アリシカ後ゼオルジ第三
 世ノ俸養ヲ受ケ羅馬ニ住シテ身ヲ終フゼーム
 ス第一世ノ位ヲ逐ハレテヨリ凡百餘年ニシテ

スキアルト氏ノ系統盡キタリ○千七百四十六
 年及七年ノ間大洲ノ戦争互ニ勝敗アリ千七百
 四十七年英ノ海軍大将アンソン佛人ト戦テ之
 ニ勝チ尋テハウク又佛人ヲ海上ニ破リ千七百
 四十八年十月交戦ノ諸國遂ニアイクス、ラ、ギパ
 ルニ會シテ和ヲ結ヒマリアラ塊地利ノ帝位ニ
 復ス○千七百五十二年英國曆ヲ改メ九月中十
 一日ヲ除キ其三日ヲ以テ九月十四日トス是ヨ
 リ先^キ歐洲諸國用キル所ノ曆ハ^ヰヰリアン曆ト名
 ケ羅馬ノ頃^ヰヰリス、レ^ヰザルノ算定セル所ニ

シテ三百六十五日ヲ一周歳トシテ四年ニ一タ
 ヒ閏ヲ設ク然レトモ其推歩未精覈ナラスシテ
 日行曆ニ先コト一閏コトニ凡四十分其差千
 百年間ニ至リ積テ十日ヲ成ス故ニ千八百八十
 二年羅馬法王グレゴリ^ヰト云フ者其謬ヲ正シ
 新曆ヲ造テ領行セレカ諸國次第ニ其法ヲ採用
 シ名ツケテグレゴリヤン曆ト云フ是歳英國亦
 之ニ從テ曆ヲ作りグレゴリ^ヰノ時以來又一日
 ヲ差スルヲ以テ十一日ヲ除去シ國內ニ領行シ
 テ之ヲ遵用セシム又英國ノ習俗古来^マ^ヰチ^今時

改正

文

音

ノ

ノ

三月廿五日春分ノ節ヲ以テ歳首トセシカ是
 歳又之ヲ改メジヨニアリ
 歳首トス地球太陽ヲ周行スルハ凡三百六十五
 日五時四十九分四秒ニシテ其奇數四年ヲ以テ
 積テ未タ一日ニ滿タサハ方今ハ百年コト此差一
 年ニシテ殆一日ナラ故ニ方今ハ百年コト此差一
 タビ閏ヲ缺ク然レトモ尚少クアリテ未キ凡
 合セテ故ニ又四百ニ一タリテ未キ凡
 二千年コトニハ四百ニ一タリテ未キ凡
 ハ未ニ及ハタ故ニ一タリテ未キ凡
 其差又増シテ十日ニ一タリテ未キ凡
 羅斯ノ未新曆ヲ用キト故ニ毎年歐洲諸國中
 十月ノ以テ其一月ノ日トス又英國昔時春分
 日コトナシ故ニ其新年ハ月名日數ハ今ト異ナ
 日ニ在ラシ故ニ其新年ハ月名日數ハ今ト異ナ
 亞墨利加洲中英ノ屬地佛國所屬ト境ヲ接シ

テ争ヲ生スルコト數ナリ千七百五十五年佛人
 英地ノ後ニ浴テ連岩ヲ築キカナダ及ルイシア
 ナノ二州ヲ合セント謀リ又屢土人ヲ啖シテ其
 境上ヲ擾リ英國之ヲ争ヘトモ聽カズ是歳佛人
 船ヲ裝テセント、ロウレンス河ニ遣ラントレ其
 船ブレस्त港ニ碇泊セシカハ英人襲テ其二艘
 ヲ奪ヒ遂ニ令ヲ下シ佛船ノキリール及オルテ
 ガル兩海角間ニ在ル者ハ悉ク奪テ之ヲ毀焚セ
 シハ是ニ於テ佛國怒テ大ニ戰備ヲ修シミノル
 カ島ヲ奪テ之ニ報セントス時ニ英國ニイラス

ルト云フ者主トシテ事ヲ用キシカ間愚ニシテ
 之ニ備ヘス千七百五十六年四月佛ノ軍艦陸兵
 一万六千ヲ載セマホン港ルカニ至テヒッポ城
 ヲ攻ムニヒッポスル始メテ驚キ急ニバイント云
 フ者ニ戦艦十艘ヲ附シテ其救ニ遣リシカバイ
 ン既ニ至テ敢ヘテ戦ハス既ニシテ其軍ヲ率キ
 ジブラルタルニ歸リシカハヒッポ孤立シ六月
 二十七日城陥リ守將軍ヲ撤シテジブラルタル
 ニ退入ス是ニ於テ國人バインヲ怯ヲリト謂ヒ
 後軍法ヲ以テ糺彈シ觀望救ハサルニ坐シテ之

ヲ砲殺ス○ヒッポノ役國人又頻ニヒッポスル
 ヲ咎ム王乃之ヲ罷メキルレム、ピットヲ舉ケテ之
 ニ代ヘシカ既ニシテ王又ピットヲ罷メテ再ヒッ
 ケスルヲ抽用ス然レトモ國人ピットノ能ヲ慕テ
 ニヒッポスルニ服セス是ニ於テ王ヒッポスルヲ
 以テ會計總裁トレピットヲ國事總裁トシ并ニ之
 ヲ任用ス然レトモ是ヨリピット主トシテ事ヲ用
 キ大ニ能名アリ○アイクス、ラ、キ、ベルノ條約各
 國ノ壇域故ノ如クニシテ、グロイ、ス、ト、ノ、レ、レ、ヤ、ヲ
 得是ヲ以テ日帝マリア心ニ甘セス千七百五十

六年密ニ俄羅斯、佛蘭西、瑞典及波蘭ポランドト連盟シテ
 レレシヤヲ奪還シ且テ國ヲ割テ之ヲ分取セン
 トス然ルニ亭王フレデリック二世其議ヲ洩レ
 聞キ先發シテサクソニーニ入テ諸方ヲ攻略ス
 時ニ英國佛ト兵ヲ構ヘ且ツフレデリックハ英王ニ
 於テ甥タリ故ニ此亂英國獨テ漏生ニ與シ千七
 百五十七年王コンベルランドノ侯ヲ遣テフレ
 デリックヲ援ケレム是レ七年間戦争ノ始ナリ○是
 歳ノ間コンベルランドノ侯ハノーブルニ在テ
 佛將リセリュート戦テ屢利ヲ得ス侯ノ軍エルグ

河ヲ渡テ退キ遂ニ悉クハノーブルヲ失フ王之ヲ
 聞テ大ニ怒リ其英ニ歸ルニ及テ復之ヲ禮セス
 爰ニ於テ侯亦憤懣シ自兵權ヲ解テ退キ是ヨリ
 復テ世事ニ關セス後千七百六十五年ニ至テ死ス
 ○千七百五十八年英ハ水陸軍二万ハウ及アン
 ソン等之ニ將トレヒルブル佛ノ港名ヲ攻ムテ
 利アラヌ八月英將グライ再攻メテ之ヲ取り敵
 ノ大砲百七十門ヲ毀損シ其二十二門ヲ奪フ○
 是歳ブリュッセルスブリュッセルノ部長ブルジナンド佛軍ヲ
 ライン河西ニ追卻レハノーブルヲ復ス○千七

百五十九年七月英ノ海軍大将ロニーハノー
 ガルヲ圍テ其邑ヲ焚略シ同八月エドワルドハ
 ウクブレストヲ圍ミ二十一日キベロンノ近傍
 ニ於テ佛ノ戦艦ト戦テ大ニ之ヲ破リ其四艘ヲ
 沉メ二艘ヲ奪フ○是歳五ルジナンド英軍ヲ將
 井ベルゼンヲ攻メテリアラス其後佛軍トミン
 デンニ戦テ全勝ヲ獲此役騎兵ノ大将ゼオルジ
 其兵ヲ勒シテ觀望シテ五ルジナンド三々ヒ其
 進撃ヲ促セトモ命ヲ用キス是ヲ以テ佛軍僅ニ
 覆滅ヲ免レタリ後ピット怒テ盡ゼオルジノ官職

ヲ禡フ○是歳英國カナダヲ取ラントシピット自
 攻進ノ策ヲ畫シ軍ヲ分テ三トシ一ハオンタリ
 オ湖ヲ下テモントリールヲ取リ一ハオンプラ
 イン湖ヨリ進テチコンデラゴヲ取リ一ハウル
 フト云フ者ヲ將トシテ兵士八千人セントロウ
 レンス河ヲ上リ三軍ケベツキニ於テ相會セント
 期ス然レトモ湖上ノ二軍途中ニ逗撓シ七月二
 十七日ウルフ獨ケベツキニ至テ他ノ軍ヲ待テト
 モ至ラスケベツキノ邑ハニ方ニ水ヲ帶テ河岸峭
 立シ後ニアブラハムト名ツケル小山アリテ最

峻絶躋ル可ラス佛將モントカルム一万人ヲ以テ邑外ニ在リ七月三十一日ウルフ兵ヲ率キテ之ヲ攻メシカモントカルム善ク防クヲ以テ破ルコト能ハスウルフ乃計ヲ決シ襲テ之ヲ取ラントス時ニ英軍要所ヲ分守シテ見兵纔ニ三千六百ニ過キス其舉實ニ危策タリ九月十三日夜ウルフ軍ヲ潛メテ河ヲ遡リ行古詩ヲ誦シ慷慨トシテ歌テ曰ク功名ノ路ハ必黄泉ニ指サストスアブラハムノ山下ニ達シタルヲ先躍テ岸ニ上リ全軍之ニ隨ヒ蘿ヲ攀チ崑ニ附シテ黎明

山頂ニ至リ稍坦處ヲ得テ邑ヲ壓シテ陣スモントカルムハ未之ヲ知ラス夜既ニ明ケテ始メテ曉リ倉卒出テ禦テ銃丸ヲ亂發ス然レトモウルフ沉默シテ敵ヲ待チ一丸其腕ニ傷クレトモ尚之ニ應セス敵間既ニ數十歩ニ迫ルニ至テ急ニ令ヲ傳ヘテ全軍齊發シケレハ佛軍稍動揺シタリウルフ乃高ニ乗シテ馳突シ衆ヲ勵マシ督戦セシカ又連ニ二丸ヲ受ケ遂ニ地ニ倒ル既ニシテ佛軍潰亂ス時ニ從兵ウルフヲ陣後ニ昇シテ其傷ヲ看護シ一人軍ヲ望ミ見テ曰ク走ル々々

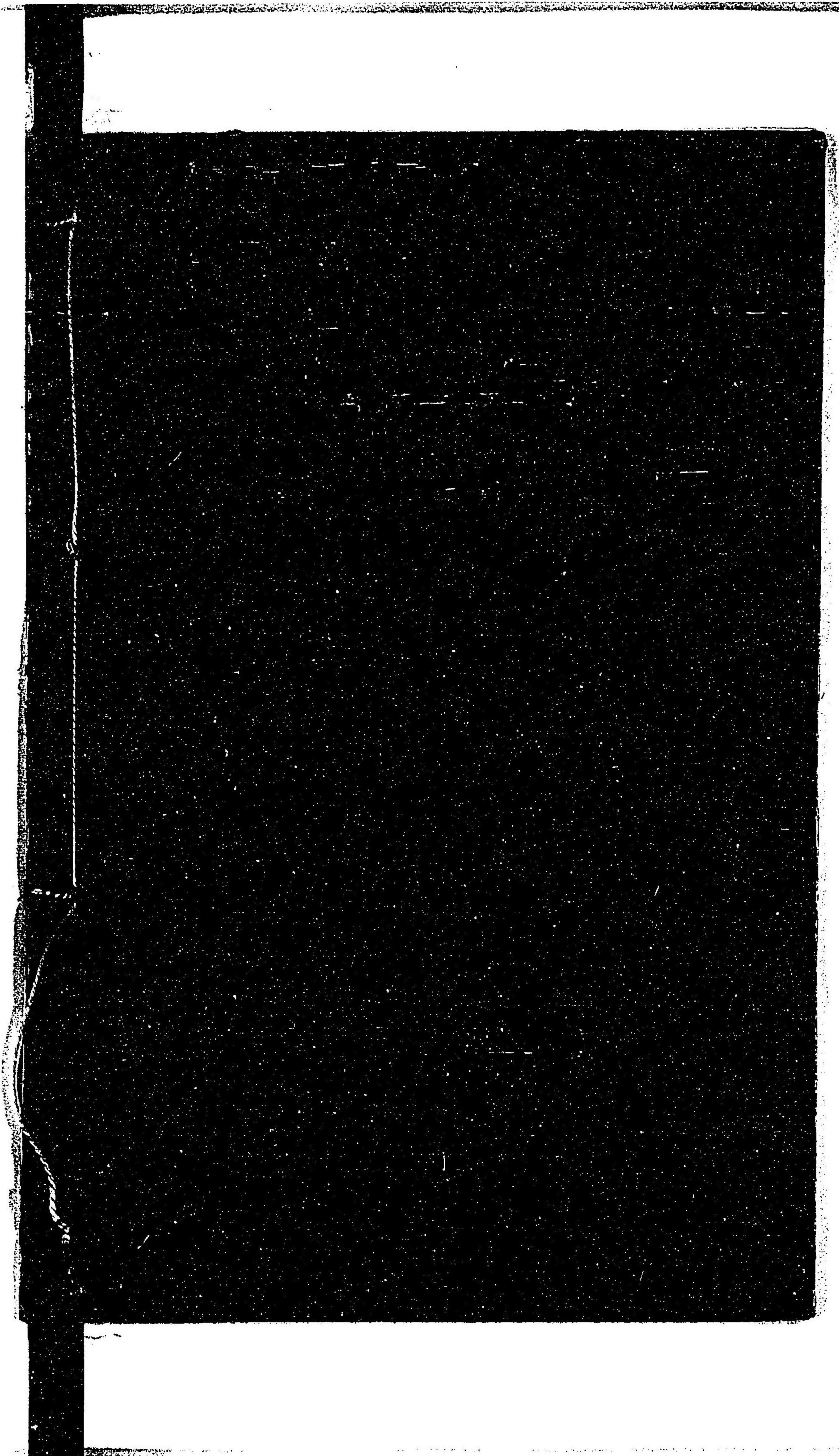
トウルフ急ニ問テ曰ク走ル者ハ誰ソヤ其人ノ
 曰ク佛軍ナリトウルフノ曰ク然ラハ余死シテ
 瞑ス可シト語畢テ息絶ユ此役モントカラム亦
 重傷ヲ蒙リ軍醫ヲ呼テ其死ヲ問フ醫師ノ曰ク
 明朝ヲ待タストモントカラム乃悦テ曰ク余幸
 ニシテケベッキノ降ヲ見ルニ及ハスト翌日黎明
 又遂ニ死ス是日邑陥リ佛軍降ヲ請ヒ翌年春ニ
 至テカナダ盡英ニ歸ス後英人二将ノ勇ヲ追慕
 シ碑ヲ建テ其名ヲ合刻シテ戦死ノ跡ヲ吊スト
 云フ○千七百六十年十月二十五日王死ス年七

十七在位三十四年是ヨリ先千七百五十一年長
 子フレデ多キ既ニ死セルヲ以テ嫡孫ゼオルジ
 ヲシテ位ヲ嗣カシム○千七百九十九年倫敦ノ
 市人始メテ東印度商社ヲ結ヒ東方ニ通商セシ
 ヲリ其貿易日ヲ逐テ隆興シ千七百年間ニ至テ
 マドラスボンベー及カルキタノ三所最富盛ノ
 地ト為レリ然レトモ其時本國ノ商賈土人ノ地
 ヲ借り或ハ之ヲ買ヒ商館ヲ設ケテ交易スルニ
 過キス千七百五十六年蒙古ノ所屬ベンガルノ
 部長シラギドウラト云フ者カルキタヲ襲取シ

英人百四十六名ヲ捕ヘテ之ヲ獄ニ下ス然ルニ
適盛暑ノ候ニ當リ獄内狹窄ニシテ死スル者一
夜ニ百二十三人翌朝獄ヲ開テ之ヲ視レハ其生
存セル者ハ幾何モ~~レ~~是ニ於テ英人憤怒シロ
ベルト、クライブト云フ者ヲ將トレテドウラト
戦ヲ起シ、カククライブ智勇ニシテ連戦皆勝チ
數年ニシテ遂ニ盡~~ク~~ベンガルヲ戡定ス是英ノ印
度ヲ屬隸スル濫觴ナリ

今邨 亮 校

改正 英史卷八終



米京園香朝
一冊
六
二
五
一
冊
号
架
函
厨
類